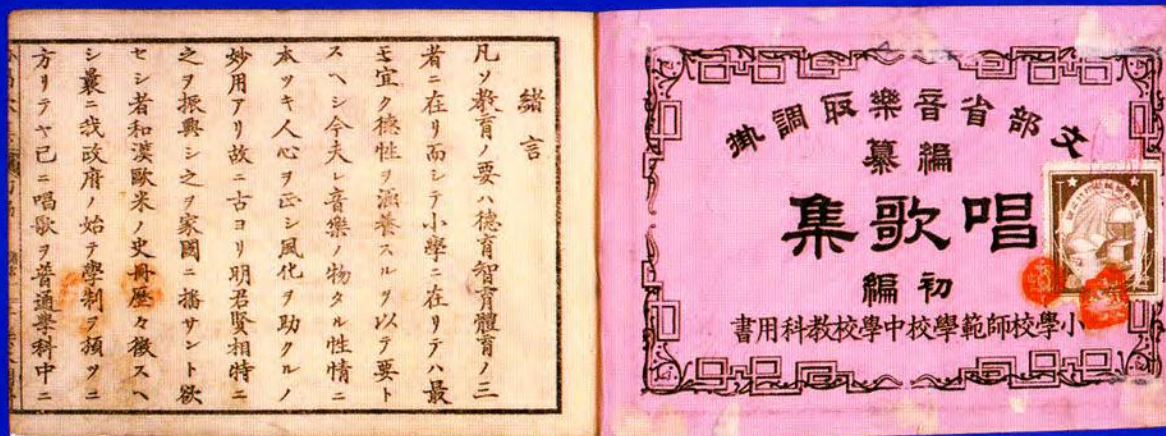


博物館だより



『小学唱歌集 初編』

「^{いながき ちかい}螢の光」と稲垣千穎

明治5年(1872)の学制は、日本に近代学校制度を導入する初めての総合的基本法令で、国民皆学を目的とする小学校の義務教育制などの方針を具体的に示したものでした。そこでの小学校の授業科目としては、「習字」「文法」「算術」「唱歌」などの教科が掲げられていましたが、「唱歌」に関しては「当分之ヲ欠ク」としていました。楽器や楽譜も整わない当時の状況では、授業をするのが困難だったようです。そのため文部省では、明治12年になって省内に音楽取調掛を設置し、音楽教育についての調査研究を行うことにしました。その成果は、明治15年から20年にかけてわが国最初の国定唱歌教科書として、『小学唱歌集』3巻、『幼稚園唱歌集』1巻が刊行されました。

図版に掲げたものは、明治15年に刊行された『小学唱歌集 初編』に載っている「螢」の唱歌です。この「螢」は、現在でも「螢の光」として小学5年生用の音楽教科書に掲載されています。「螢の光」は卒業式

などでよく歌われてきたため、私たちには馴染みの深い唱歌です。『小学唱歌集』は、文部省音楽取調掛の共同著作物であるため、曲ごとの作詞作曲者名は表示されていませんが、「螢」の原曲はスコットランド民謡「久しい昔 (Auld Lang Syne)」、作詞者は稲垣千穎であることがわかっています。

作詞者の稲垣千穎は、最後の川越藩主松平周防守家の家臣で、若い時から学問を志し、藩校長善館が明治維新後文学寮と改称するに及んで、教員となり国文学を教授しました。明治2年には、23歳で東京の平田鉄胤塾に入り、塾頭にまでなつたと伝えられています。明治7年に開設間もない東京師範学校の教師となり、同14年に助教諭、同16年に教諭と進みましたが、明治17年には何故か職を辞しています。この間、東京師範学校校長伊沢修二(音楽取調掛を兼務、音楽教育の開拓者)の要請により、明治13年に音楽取調掛に就任し、『小学唱歌集』の作詞者の一人となりました。

さいもん ばしょうおうをまつるぶん はいかい も も よ く さ
芭蕉百回忌祭文「祭芭蕉翁文」と『俳諧茂、代草』

1. はじめに

元禄7年(1694)に旅の途中で病に倒れた松尾芭蕉は、同年10月12日、大坂御堂前花屋仁右衛門方で門人に看取られながら、「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」の名句を残して51歳で没しました。芭蕉の遺骸は遺言によって近江国膳所(現滋賀県大津市)の義仲寺に葬られました。義仲寺は、悲劇の武将木曾義仲に由縁のある寺として知られています。

寛政5年(1793)は芭蕉が没してから百回忌に当たる年で、全国各地で芭蕉百回忌の法要が、俳諧を志す人たちによって催されました。そこでは、芭蕉塚や句碑が建立されたり、追善句集が奉納されたりしました。

ここで紹介する「祭芭蕉翁文」(川越市立博物館蔵太田家文書)は、雪中庵系の俳人が、芭蕉の百回忌に追善句集を江戸深川(現東京都墨田区)の要津寺に奉納した時の祭文です。雪中庵は蕉門十哲のひとり、服部嵐雪(1654~1707)の庵号で、後に嵐雪に連なる蕉門の結社を雪中庵と称しました。また要津寺は、嵐雪の墓があるなど雪中庵ゆかりの寺です。

今回は、「祭芭蕉翁文」の資料を中心に、芭蕉顕彰活動としての芭蕉百回忌、さらには川越と蕉門の繋がりを考えていきたいと思います。

最初に、安永期(1772~1781)から寛政期(1789~1801)にかけて、芭蕉顕彰活動を展開した蝶夢(1732~1795)の活動について見ていきます。

2. 蝶夢の芭蕉顕彰活動

芭蕉五十回忌の寛保3年(1743)頃から、蕉風俳諧の復興を目指し、芭蕉に帰れという運動が起こり始めました。そして芭蕉百回忌の寛政5年頃には、その運動が全国的に高揚したと考えられています。

蕉風復興運動の一翼を担い、芭蕉塚建立などの芭蕉顕彰活動を展開した人物に蝶夢がいます。蝶夢は京都に生まれ、時宗法国寺の其阿について出家し、13、4歳の頃浄土宗阿弥陀寺婦白院に転じ、宝暦6年(1756)に十一世住職となりました。俳句を宗屋(俳人、1688~1766)に学び、蕉風復古を説いた二柳(俳人、1723~1803)に感化されて、芭蕉研究に尽力しました。蝶夢は明和5年(1768)に僧門を離れ、京都岡崎に五升庵を結び、以後約30年間蕉風復興活動を展開しました。宝暦13年からは、近江国粟津の豪農文素の後を請けて、

芭蕉の命日に義仲寺で催されていた俳諧法要時雨会を営み、芭蕉墓所の護持と芭蕉追善行事を行いました。また、全国各地で、義仲寺の土や芭蕉の遺品、芭蕉の句を記した短冊などを埋めて霊とした芭蕉塚の建立を勧め、地方俳人による芭蕉供養や俳諧興行を先導しました。芭蕉を宗祖に見立て祀って、礼拝する場を作ることによって、蕉風俳諧流布の拠点作りを目論み、蕉風俳諧に精神性を求める芭蕉の崇拜者を増やしていきました。



義仲寺 (写真：大津市提供)

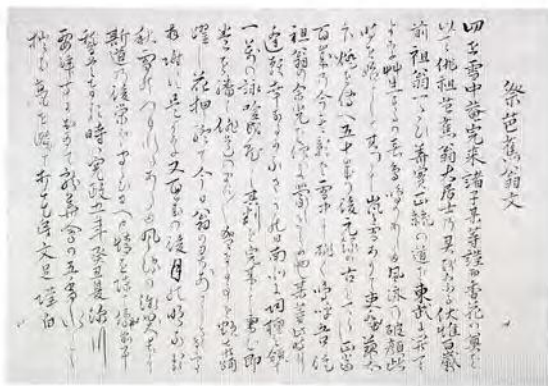
また蝶夢は、安永3年(1774)から芭蕉の全著作を集めて『芭蕉翁発句集』『芭蕉翁文集』『芭蕉翁俳諧集』の三部作を編纂し、京都寺町の版元橘屋治兵衛から出版しました。刻版料等出版にかかわる費用は、全国に散在する支援者からの資金提供があって成し遂げられたもので、蝶夢の芭蕉顕彰運動が大勢の人々に受け入れられたことを示しています。

寛政4年に蝶夢が著した『芭蕉翁絵詞伝』という初の本格的芭蕉伝は、私たちの芭蕉像のイメージ形成にも大きな影響を与えています。幼少時に時宗の寺で修行した蝶夢は、『一遍上人絵詞伝』に描かれている祖師一遍に芭蕉を重ね、『芭蕉翁絵詞伝』を著したと言われています。

蝶夢の多彩な活動は、芭蕉顕彰史上最大の功績を残し、俳諧を志す者に多大な影響を与え、全国各地で芭蕉追善の活動が執り行われました。

3. 雪中庵の芭蕉翁百回忌法要

服部嵐雪が開いた俳諧結社である雪中庵は、嵐雪の後を享保17年(1732)に桜井史登が二世を継ぎ、延享4年(1747)に大島蓼太が三世を継承しました。芭蕉翁百回忌に巡り合った雪中庵一門がどのように百回忌法要を行ったかわかる資料が「祭芭蕉翁文」です。



「祭芭蕉翁文」

〈釈文〉

祭芭蕉翁文

四世雪中庵完来諸子某等謹而香花の奠を以て俳祖芭蕉翁大居士の靈を祭る、伏惟百歳の前祖翁一たび華実正統の道を東武に開てより艸生するの春、鳥鳴のあした、風流の破顔此時を始として其門に嵐雪ありて吏登蓼太に燈を伝へ、五十歳の後元録の古をてらし正当百歳の今其影を雪中に挑く、嗚呼吾徒祖翁の余光を仰き蒙らさらめや、某等此時に逢る幸なるかな、さきの日南北に詞壇を領て一万の詠喩成就し其判を完来に需む、即巻を播て俳道のますへ盛なる事を歓喜踊躍し花押終て今日翁の靈前にさ、けて拝謝す、是より又百歳の後、月の明なる秋、雪のつもれるあした、風流の漸笑長に斯道の後栄を守らひ給へと情を陳て像前に稽首奉る、時ハ寛政五年癸丑夏深川要津寺において龍華会の五香水に拙き氣を瀝て打 花房文足謹白

上記資料にある四世雪中庵完来は富増完来といい、伊勢国津藩士でしたが、明和(1764~1772)の中頃蓼太門に入り、後に蓼太の養子となりました。完来は蓼太没後、天明7年(1787)に四世雪中庵を襲名しました。嵐雪、吏登、蓼太と継承してきた雪門の灯火を継いだ完来の時に、芭蕉の百回忌を迎えることになりました。雪中庵一門は、芭蕉翁百回忌に巡り合えた幸せを感じ、広く句を募りました。そして完来に判者を頼み句集を作って、俳諧の道が益々盛んになることを願い、芭蕉

【雪中庵略系譜】

雪中庵一世 二世 三世 四世 五世
 服部嵐雪—桜井吏登—大島蓼太—大島完来—大島対山
 六世 七世 八世
 一山口椎陰—村井鳳州—原田(服部)梅年

翁の靈前にささげました。時は寛政5年夏、雪中庵所縁の寺要津寺で花房文足が導師となって祭文を唱えたものと考えられます。花房文足がどのような人物かは、今のところ不明です。

またこの祭文から、要津寺では龍華会というお釈迦様の誕生を祝う行事(4月8日の花まつり)が行われていたことがわかります。「四世雪中庵完来諸子某等謹而香花の奠を以て」をみると、お釈迦様の誕生を祝う龍華会に因み、雪中庵完来等が芭蕉翁を俳諧の誕生仏と見立て崇めて、この日は特別に俳祖芭蕉翁大居士の靈を祭っていたとも考えられます。

芭蕉は寛文12年(1672)、故郷伊賀上野から江戸に出てきましたが、深川は延宝8年(1680)に芭蕉が日本橋から移り住んだ場所です。深川は芭蕉所縁の地として、嵐雪や吏登も芭蕉庵の近くにあった要津寺に墓を造り、やがて要津寺は雪中庵の芭蕉顕彰活動の拠点となりました。雪中庵三世大島蓼太は、芭蕉七十回忌の宝暦13年(1763)に、要津寺に芭蕉の佛塚を建立し、さらに明和8年(1771)には同所に芭蕉庵を再興しています。また蓼太は、師である吏登の十七回忌も兼ねて芭蕉百回忌取越し追善供養を行い、明和9年に芭蕉翁百回忌発句塚碑を、安永2年(1773)には「古池や蛙飛びこむ水の音」の芭蕉句碑を要津寺に建立しました。

さて、雪中庵ではすでに明和8年に蓼太が期日を繰り上げて芭蕉百回忌を営んでいたのですが、この祭文からは、改めて正当の芭蕉百回忌に遭遇できた俳人たちの喜びが伝わってきます。



要津寺 (写真：墨田区教育委員会提供)
雪中庵関係石碑群

4. 芭蕉翁追善句集『俳諧茂、代草』

『俳諧茂、代草』(川越市立博物館蔵渡辺刀水取集文書)も芭蕉翁百回忌の追善句集です。催主が野州黒羽(現栃木県大田原市)の其流、楚舟、秋花で、丁夢庵岩松が校合した句集です。伊勢国神戸藩主本多清秋の序文を次に掲げます。



『俳諧茂、代草』

〈序文〉

芭蕉翁のはいかいの光明あまね遍く十方に照して、南瞻部なんせんぶ州の衆生花に戯れ月に嘯く、人々無量微妙の句を得るもの其恩徳をしたはさるハなし、今年百回の遠忌えんきを弔ふの徒粟のぬしそれか中に野州黒羽の其流楚舟秋花の三人、其余風をしたひ謁仰の頭をかたむけ翁あわせ行脚の杖しはらく此地にと、められし因みによりて、彼細道にもれたる吟、其角嵐雪の筆を下せる物を併あわせて、年回靈前の莊嚴を添んと岩松を導師として、普あまねく法界の句々を撰取するのはしめ一鉢を以我に序を乞ふ、手の内に腐毫を握て書与ふ、此結縁にひかれて我等衆生皆共俳諧と回向して退下えこう

時爾 寛政五癸丑冬十月十二日 俳老仙清秋

この序文からは、芭蕉翁が普くそそいでくれる俳諧の功德を拝謝し、翁の恩徳を慕い、野州黒羽の其流ら3人が催主となって芭蕉翁百回忌追善句集を奉納し、回向したことがわかります。芭蕉が東北を巡遊してこの黒羽の地で詠んだ句のうち、その紀行文『奥の細道』に入らなかった句や芭蕉の弟子の其角と嵐雪の真筆を模写したものを付して、『俳諧茂、代草』が編まれました。

また、清秋の子息其香が記した後書きをみると、芭蕉翁の靈前に追善句集を供え、丁夢庵岩松が導師となり、経文を唱え礼拝したことがわかります。そしてこの句集の版木が途中で火災により焼失したため、寛政9年8月によろやく版が完成したことも記されています。この資料から芭蕉百回忌追善句集が芭蕉所縁の地、下野国でも催され、芭蕉翁の靈前で「祭芭蕉翁文」のような祭文が奏上され、厳粛に追善句集が奉納された様子がわかります。

5. 蕉門と川越

川越は中世の頃城内で催された河越千句でも知られるように、古くから連歌や俳諧の盛んな土地柄でした。宝永元年(1704)川越に転封になった秋元但馬守喬知

の前任地は甲斐国谷村やむらでした。秋元侯の城代家老高山しげふみ繁文は麁躰びじと号し、芭蕉の初期の門人でした。天和2年(1682)、大火で江戸深川の芭蕉庵が類焼したため、芭蕉は翌年の夏の一時期、麁躰を頼って谷村に50日ほど滞在しました。麁躰は晩年を川越で過ごし、享保3年(1718)に70歳で没しました。麁躰の墓は現在も川越市石原町の本応寺にあります。芭蕉の門人麁躰の影響もあってか、川越では蕉門の俳諧が盛んでした。それは川越を領治する大名やその家臣、豪商、豪農などによって、句会を通じた交流がもたれたことが、残された資料の断片からも推し量ることができます。

また、川越市内には江戸時代の芭蕉句碑が4基確認されています。その内芭蕉百回忌に近い寛政3年(1791)の句碑は、狂歌師白川与布祢よふね(俳名雲歩)が仙波弁天社の傍らに建立したものです。碑面には、「名月や池をめぐりて夜もすから」の芭蕉句が刻まれています。この句碑は、現在喜多院境内にあります。

明治期に雪中庵を継承した原田梅年ばいねんは文政4年(1821)に入間郡並木村(現川越市)で生まれています。梅年の母は並木村の小林家に嫁ぎましたが、夫が早く亡くなったため、梅年を連れて下福岡村(現ふじみの市)の実家原田家に戻り、梅年はそこで育ちました。成長した梅年は、川越城下の足袋屋に奉公に行きましたが、その後江戸に出て、足袋商をしながら俳諧の道に入ったと言われています。梅年は天保8年(1837)16歳で雪中庵対山の門下に入り、明治7年(1874)に雪中庵を継ぎました。

6. おわりに

芭蕉五十回忌頃から胎動してきた蕉風復興運動も、七十回忌、八十回忌頃は最盛期となり、百回忌頃には一応の決着をみます。「祭芭蕉翁文」から、雪中庵系俳人たちの芭蕉翁百回忌追善句集奉納時の様子を見ました。また、黒羽地方の蕉門の俳人仲間、黒羽根連の追善句集『俳諧茂、代草』などからも、芭蕉追善が全国各地で営まれたことがわかります。それにしても、雪中庵が時を隔てて川越生まれの原田梅年へ引き継がれて行ったことは、単なる偶然ではないように思われてなりません。俳諧が盛んな川越だからこそ、その所産として雪中庵梅年の出現に至ったという感を強く持ちました。

主要参考文献 *『俳文学大辞典』角川書店

*『天明俳諧集』岩波書店 他

(古文書整理員 林寿子)

博物館を身近なものに ～出前授業の実践～



よろいに触れる



かご乗り体験



火おこし体験



縄文土器に触れる

はじめに

当館では教育課程に位置付けた博物館活用を推進するとともに、学校へ出向いて授業を行う出前授業も行っています。これは、学校からの要請により、博物館の資料を学校に持って行き、博物館職員が学校において当該校の先生とチームティーチングによる授業を行うものです。このようなスタイルの活動は近年多くの博物館等においても行われていますが、博物館と学校の距離を縮める上で、また、なかなか博物館まで見学に行くことができない児童・生徒にとっては、博物館を身近に感じることができる絶好の機会となるでしょう。ここでは、当館が実施してきた事例を紹介します。

県立盲学校の実践

平成17年度から毎年、市内笠幡にある県立盲学校で出前授業を行っています。この学校の児童・生徒は県内各地域から通学(あるいは寄宿)しており、博物館への見学は困難な現状です。そのため社会科部の先生方が、当館職員との連携による授業を行うことで、児童・生徒に博物館の存在を知ってほしいとの考えから実施するようになりました。また、もう一つのねらいに、この授業を行うことで自分の通っている学校がある地域や、その歴史を知るといことがあります。

この3年間、「暮らしの中の道具の移り変わり」「縄文時代を感じる」「武士の世界を体験する」というテーマを設定しました。何よりも、この学校の児童・生徒が手に触れて、また身につけて、さらには体験してみても資料の質感、重みなどを感じてもらうことに重きを置きました。社会科部の先生方には、このテーマ設定のために博物館に来て資料を見ていただき、当館職員と数回にわたって議論を重ねました。テーマが決まると、こちらから学校へ出向いて使用する教室の大きさ、机などの備品をチェックし、当日の朝スムーズに会場設営ができるようにしました。昨年度は、よろいの着装体験、かご乗り体験を行い、児童・生徒が実際に触れる、乗る、かつぐといった体感によって驚いたり、喜んだりという感動があった授業でした。五感を

働かせながら、児童・生徒はいきいきと活動していました。

市立広谷小学校6年生の実践

日本の歴史を学び始めるこの学年では、「米づくりのむら」という弥生時代から教科書が始まっています。そこで、発展的な扱いになっている縄文時代の授業実践例を紹介します。

児童は普段の博物館見学において、縄文土器を見ることはあっても、それに触れることはなかなかできないと思います。そこで、この授業は考古資料を活用し、児童が①縄文土器に触れる(破片資料)熟覧する(完形資料)、②縄文土器の文様をつける、③黒曜石の剥片でものを切る、④火をおこすという4つのコーナーを教室に設営し、1単位時間(45分間)の中でグループごとにローテーションするという内容で行いました。ここでは博物館から2人の職員が入り、担任の先生と3人体制をとりました。

児童は縄文土器の質感を味わい、文様の不思議さ、黒曜石の鋭さ、火おこしの大変さなどを体感し、この時代の生活を想像するというねらいに迫ることができました。

まとめ

この授業を実りあるものにするためには、学校と博物館のお互いの連携が何より大切になります。具体的には博物館職員と学校の先生との綿密な話し合いによるテーマの設定、資料選定、役割分担また授業を行う場所、設備の確認等です。

博物館は多くの資料を保存していますが、今後はそれを如何に活用するかということも考えていかなければならないと思います。学校と博物館が協働して授業を行うことは、学校側では学習活動を活性化でき、博物館側では眠っている資料を活用できるという面で、それぞれメリットがあります。

当館では、これからも学校からの要請に対してできる限り応えていき、出前授業の充実を図っていきたいと考えています。(教育普及担当 石井伸明)

分館だより

—本丸御殿を修理します—



川越城本丸御殿は季節を問わず県内はもとより、都内や近県からもたくさんの方にお越しいただいています。おかげさまで平成19年度は約14万人もの方々に足を運んでいただきました。本当にありがとうございます。本丸御殿は県指定文化財(建造物)であり、江戸時代末に焼失した二の丸御殿に替わって、嘉永元年(1848)に川越城の中心施設として竣工しました。今年はちょうど160年目にあたります。当時は火災の復興や外国船警固など藩の財政状況は厳しかったと想像されますが、石高17万石の格式を示す壮大な御殿であったことを絵図などから読み取ることができます。しかし、わずか20年で明治維新を迎え、城の中心として機能した期間は決して長いものではありませんでした。

その後、本丸御殿は玄関・広間部分を除く大部分が解体されましたが、家老詰所といわれる建物がふじみ

野市の商家に払い下げられ、昭和62年まで使われていました。この建物は商家の建替えを契機に川越市に寄贈され、現在の本丸御殿西側に復元移築されています。

明治の解体以後、本丸御殿は官公庁や学校施設として利用されましたが、昭和42年には文化財として県の指定を受けるにあたり大規模な修理が行われました。このときに現在の本丸御殿の形になりましたが、それから約40年が経過し、雨漏りなどの

腐朽が目立つようになりました。そこで、今年から平成22年度にかけて、大規模な修理工事を実施することになりました。今回は屋根の葺替えをはじめ、壁の打直しや建物の歪みの修正などを行い、将来にわたってこの建物が残っていくために必要な修理を行います。また、予想される大地震でも倒壊しないような構造補強も合わせて実施し、来訪されるみなさんが安全に見学できるような建物にすることを目指しています。

工事期間中、本丸御殿は休館にさせていただきますが、工事の進捗に合わせて見学会等も計画しております。当分の間、御迷惑をおかけしますが、観光都市川越の表玄関として、末永く現状を保持するための修理でもありますので、みなさんの御理解をいただきながら、効果的な修理を進めて行きたいと考えております。

(教育普及担当)

●平成19年度●

利用状況

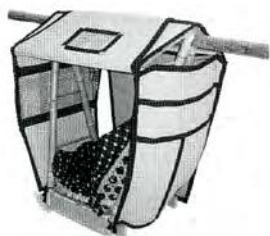
博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館

博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも、平成19年度中に、多くの皆様に御来館いただき、誠にありがとうございました。今後も、より多くの方に御満足いただけるよう、常設展示・企画展示の充実を図っていきたく考えています。皆様の御来館を心よりお待ちしております。

施設区分	年間入館者数				1日平均入館者数	開館日数
	一般	大学生 高校生	中学生 以下	合計		
博物館	73,615	3,135	32,977	109,727	373	294
川越城本丸御殿	109,298	3,938	25,644	138,880	458	303
川越市蔵造り資料館	60,749	3,367	24,481	88,597	290	306

Information

平成20年度の博物館行事です。(12月まで)



講座・教室 etc.



- …一般向け事業 開催日 講座名 内容 申込開始日
- …子ども向け事業

8月	第18回収藏品展 『明治・大正の暮らし2～古市場橋本家の事業と教養～』		
	○2(土) 夏休み子ども体験 まが玉作り 7/5		
9月	～15(月) 第18回収藏品展『明治・大正の暮らし2～古市場橋本家の事業と教養～』		
	○13(土) 土曜体験教室 十五夜の話とお月見だんご作り 9/2	○20(土) 土曜体験教室 川越まつりの山車作り 9/4	
	●14・21・28(日) 博物館歴史講座 あらためて考古学入門 9/3		
10月	11(土)～ 第31回企画展 『大名行列～描かれた松平大和守家の行列～』		
	○4(土) 子ども博物館教室 ピンホールカメラに挑戦 9/5	○11(土) 土曜体験教室 和楽器体験～三味線・琴に挑戦～ 10/1	○25(土) 土曜体験教室 昔の土笛・土鈴作り 10/3
	●5・12・26(日) 博物館歴史講座 川越藩の終焉 9/6	●18(土) 野外博物館教室 川越まつり～山車曳き体験～ 10/2	
11月	～16(日) 第31回企画展 『大名行列～描かれた松平大和守家の行列～』		
	○8(土) 土曜体験教室 かごをかついでホイサッサ 当日先着	○15(土) 土曜体験教室 手作りおもちゃで遊ぼう 当日先着	
	●1(土) 古文書講座 古文書基礎講座 10/4 ※6月と同じ内容	●3(祝) 民俗芸能実演 市指定無形民俗文化財 「上寺山の獅子舞」 申込不要	●22(土) 野外博物館教室 川越の彫刻をめぐる ～寺社建築の彫刻～ 11/1
12月	○13(土) 土曜体験教室 たこを作ろう 12/1		○20(土) 土曜体験教室 お正月飾りを作ろう 12/2

※変更の可能性もあります。申込方法も含め、詳細については「広報川越」またはホームページを御覧ください。お問い合わせは博物館まで。

夏休み子ども体験・土曜体験教室は、午前10時～11時30分と午後1時30分～3時30分の時間帯で行います。また、9/13の土曜体験教室は午後3時～5時の時間帯で行います。



第18回收藏品展

明治・大正の暮らし 2 ～古市場橋本家の事業と教養～ 平成20年7月19日(土)～9月15日(月)

当館では、川越市や周辺地域の方から寄贈された資料を広く公開する機会として、定期的に收藏品展を開催しております。昨年度の收藏品展では市内古市場の橋本家に伝わった品々の中から、欧風の生活様式を取り入れた明治・大正期の家庭の資料を紹介し、御好評いただきました。引き続き今回は橋本家の実業家としての側面に焦点を当て、家業であった醤油醸造を振り出しに金融業などへと事業を拡大していく様子と、それを支えた学識や教養を示す品々を展示いたします。



元老・井上馨からの年賀状

第31回企画展「大名行列～描かれた松平大和守家の行列～」

平成20年10月11日(土)～11月16日(日)

今回の企画展は、明和4年(1767)から慶応2年(1866)まで川越藩主を勤めた松平大和守家の行列の様子を描いた絵巻の展示を中心に、大名行列の姿を紹介します。

利用の御案内

◆入館料

区分	博物館	川越城 本丸御殿	川越市 蔵造り 資料館	共通入館(観覧)券			
				●博物館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り 資料館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り 資料館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り 資料館 ●美術館 ●まつり 会館
一般	200円 (160円)	100円 (80円)	100円 (80円)	300円	300円	450円	650円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	50円 (40円)	150円	150円	220円	450円

※()内料金は、団体[20名以上、1名につき]の場合

交通案内

東武東上線・JR川越線 川越駅より
または西武新宿線 本川越駅より、
・東武バスにて「蔵のまち経由」乗車札の辻バス
停下車徒歩8分、または「小江戸名所めぐり」
乗車博物館前バス停下車徒歩0分
・イーグルバスにて「小江戸巡回バス」乗車博物
館・美術館前バス停下車徒歩0分
※御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用く
ださい。



◆開館時間 午前9時から午後5時まで(ただし入館は午後4時30分まで)

◆休館日 月曜日(休日の場合は翌日の火曜日) ※平成20年10月20日は開館
第4金曜日(休日を除く) 年末年始(12月28日～1月4日)
館内消毒(6月下旬) 特別整理期間(12月下旬)

*開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも原則として同じ
(館内消毒・特別整理期間は博物館のみ休館、蔵造り資料館は1月2日から開館)

川越城本丸御殿は保存修理のため、平成20年10月21日から平成23年3月(予定)まで休館いたします。

8月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

9月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

10月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

11月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

※●印は3館休館(博物館、本丸御殿、蔵造り資料館)、■印は1館休館(本丸御殿)

編集後記

博物館では先日、土曜体験教室「あいぞめでハンカチ作り」を開催しました。思い思いに柄を考え、あいぞめで染めていきます。濃い色を出したり、グラデーションをつけたりと、自分だけのハンカチを完成させました。暑い日差しの下、子ども達の笑顔には達成感が表れていました。この教室は、博物館同好会の「川越唐棧手織りの会」の協力を得て開催しています。同好会は、他に3団体あります。曜日によって同好会の協力により、機織り見学・体験もできますので、詳しくは博物館までお問い合わせください。

発行日 平成20年8月20日

発行 川越市立博物館

〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1 ☎049-222-5399 FAX 049-222-5396

Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp

ホームページ http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/